

竜爪山九条の会 3 周年記念講演



村人たちの戦国と竜爪山

水野 茂

静岡古城研究会会長

目次

1	はじめに 周辺地域の抗争と山城	3
1-1	南北朝時代の抗争	3
1-2	観応の擾乱	4
1-3	今川氏の三代にわたる家督争い	6
1-3-1	永享の内訌	6
1-3-2	文明の内訌	9
1-3-3	天文の内訌	11
1-4	聖域に引き籠もる→「閉籠」	13
1-5	歴史シンポジウム・イン藤枝	13
2	日本の戦国時代とは	15
2-1	戦国時代の重い軍役（公事）	15
3	一大転機をむかえた武田信玄の駿河侵攻	16
3-1	薩埵山の戦い	17
3-2	信玄が今川の家臣に宛てた書状	20
3-3	安倍の一揆衆	23
3-4	寺社に逃げ込んだ村人	25
4	日本の合戦は雑兵たちの働き場	27
4-1	雑兵たちの三点セット	27
4-2	桶狭間の戦いの乱取	29
5	『妙法寺記』が伝える甲斐国	30
5-1	全国規模の大飢饉	30
5-2	村人たちの徳政・土一揆の蔓延	34
5-3	武田信虎・信玄が行った飢餓対策	35
5-4	武装し、一揆する村人	38

6	愛鷹山中の山小屋	40
6-1	史料に出てくる山小屋	40
6-2	愛鷹山中の山小屋は村人たちの避難所か！	44
7	竜爪山は村人たちの避難所か！！	45
7-1	竜爪山について	45
7-2	信仰の山である竜爪山は、村人たちの避難所か！！	46
7-3	穂積神社は城郭構造か！	47
7-4	竜爪山は広大な山小屋＝城郭	48
7-5	竜爪山周辺で確認された城郭遺構「行翁山」	50
7-5-1	「行翁山」遺構図	51
7-6	若山にも城郭遺構	53
7-7	13年前に発見した「長尾砦」	54
7-8	ジョアン・ロドリゲス 『大航海時代叢書』	55
7-9	聖域空間の「竜爪山避難小屋」	56



↑2010年1月11日「歴史シンポジウム・イン藤枝」
花蔵の乱―隠された真実と諸城跡―
主催の挨拶をされる水野茂さん

著者紹介

水野 茂 (みずの しげる)

1944年生まれ

城郭史研究者・写真家

静岡古城研究会会長

主な著書

『今川氏十代の軌跡』

『ふるさと古城の旅』

葵区瀬名中央1丁目在住

1 はじめに 周辺地域の抗争と山城

今から400年前、500年前の実体というのは、意外にわからないと言われておりますので、それらをひとつひとつあばきながら、それと身近な竜爪山^{りゅうそうざん}周辺、静岡市周辺、葵区中心の戦国時代の山城等、紹介しながらお話しを進めてゆきたいと思っております。

私は城郭史研究が専門ですので、お城を通じて戦国時代がどういう時代であったか、明らかにしてゆきたいと思えます。

1-1 南北朝時代の抗争

今から670年くらい前の南北朝時代は、鎌倉幕府が滅亡した後、天皇が二人立って南北に別れて戦い、日本全国が抗争になるわけです。後醍醐天皇^{けんむ}が建武の新政という新しい政府を立てたのですが、実際に鎌倉幕府をやっつけたのは武家、すなわち足利尊氏たちです。それが反旗を翻して京都に北朝の天皇を立て、南北で戦うことになります。

この時、鎌倉幕府滅亡期ですが、有名なのは楠木正成、大阪市と奈良県の境、千早城^{ちはやじょう}に立て籠って戦った有名な話がございまして。あそこの城は全山が金剛山系^{こんごう}といいまして信仰の山です。

ですから、ああいう山の高い所に建てるお寺さんというのは天台宗とか真言宗という、修羅場^{しゅらば}、修行所にするわけです。そうした聖地に山城を造って立て籠ると言われています。

これが静岡県でも言われていることなんですが、一番有名なのは安倍城^{あべじょう}。安倍川^{あべかわ}の西側、標高が435m。南北朝時代の大將格であります狩野介貞長^{かのうのすけさだなが}が入った山城であると言われてはいますが、この山が全山そうなんです。

今川氏は足利尊氏の命によって、この駿河に入ってきたわけです。反旗を翻したのが地元の狩野介貞長。大きな抗争になったということが知られているわけですが、この戦いの中で実は、こういった所が城になっています。



↑ 安倍城(静岡市葵区)を東より望む



← 安倍城の本城といわれる山頂



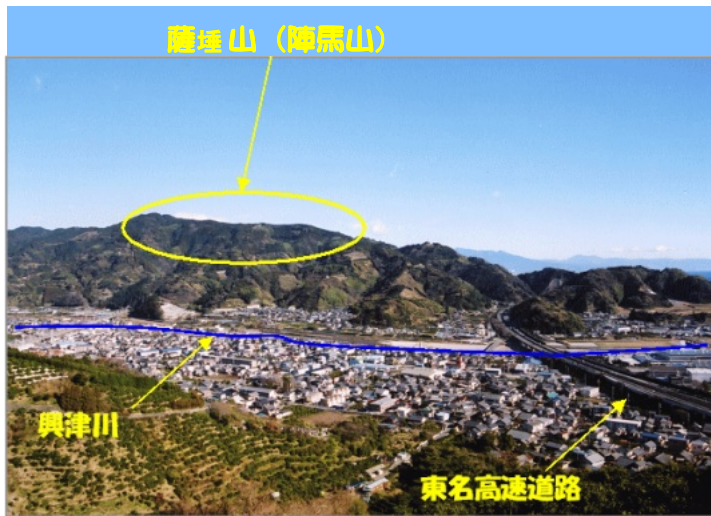
↑久能寺城 (静岡市駿河区根古屋^{ねごや})

くのうざん
久能山東照宮です。前身はくのうじ
くのうじ
久能寺というお寺さんがありました。このときの戦い
のなかで南朝方、しみず
しみず
清水に本拠地を持っていたいりえするがのみ
いりえするがのみ
入江駿河守という人物がいて、負けて、
ここに入っています。文書史料の中に、「久能寺城」と書いてあります。

このお寺さんも確か、真言宗のお寺さんだったと思います。山岳密教系の山の高い所が寺院として使っていたと知られています。

1 - 2 観応の擾乱

南北朝争乱期の中で、かんのう
かんのう
観応年間（1351年）に起きたじょうらん
じょうらん
「観応の擾乱」。足利尊氏が
武家政権を立てたのですが結果的には、ただよし
ただよし
足利直義、足利尊氏の弟ですが、対立関係
になって戦います。なおかつ、駿河南朝方と戦うということになって「天下三つに分かれて合戦止むことがない」、といわれています。



↑ 薩埵山の戦い（静岡市清水区由比・興津）

そういった戦いが行われたところが、薩埵山さつたやまですね。これが、興津川おきつがわ。これが東名。足利尊氏方について今川氏はこの山塊帯の薩埵山に布陣して、東側から西進する直義方の兵を防いだわけです。

この時の直義方の兵がなんと、大手軍30万おおて、搦手軍20万からめてというオーバーな数字を伝えています。実際はそんな数ではありません。

この一帯で戦って、結果的には弟の直義ただよしが敗れて、鎌倉で捕まって謀殺されるという結果になります。実質上、尊氏が実権を握っていくことになるわけです。

その戦いが薩埵山を中心に行われただけでなく、手越河原てごしがはらでも合戦がありました。この碑がある所は、JRの安倍川駅のすぐそば、みずほ公園にあります。

その地域で新田義貞と足利尊氏派が、「雷が地に落ちたるような戦い。10万の兵で17度も戦った」という記録が出てきます。この戦いは勝敗を決することなく、お互い痛み分けということになりました。

結果的には、足利尊氏が弟の直義ただよしを討ってから駿河南朝方の掃討作戦となり、このときも手越河原で合戦になりました。



↑ 手越河原合戦の碑
（駿河区みずほ）

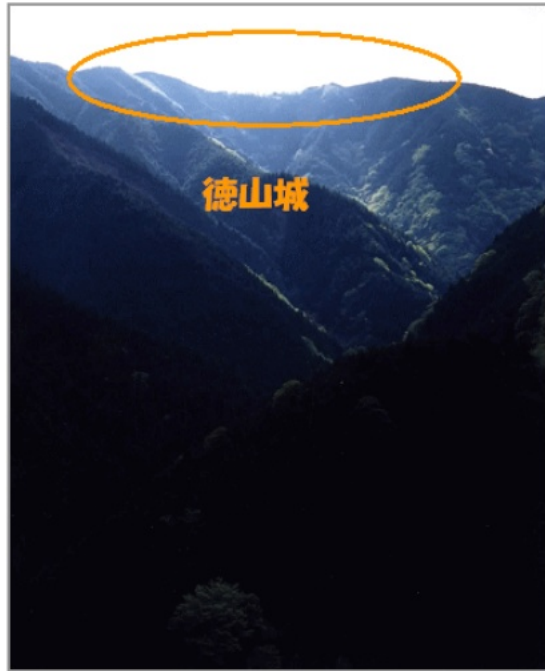


駿河南朝方の勢力である佐竹兵庫亮さたけひょうごのすけとかなかやまさぶろうざえものじょう中山三郎左衛門尉という名前が出てきます。この人物は安倍城から逃れ、次に入ったところが大津城おおつじょうです。島田しまだのバラの丘公園の近くにあります。

← 大津城（島田市野田）

大津城に入って、また攻められ、最終的に駿河南朝方が入ったのが徳山城とくやまじょうです。旧・中川根町なかかわねちょう、現在、川根本町かわねほんちょうと呼んでおりますが、この高い所、無双連山むそうれんざん、標高が1100m位あります。ここに籠城した南朝方の勢力、鴛彦太郎ときひこたろうなどという名前が出て来ます。ここも攻められて落城し、これをもって駿河南朝方がここで滅亡するという結果を招いております。

徳山城（川根本町徳山）→



1-3 今川氏の三代にわたる家督争い

そのあと（駿河南朝方が滅んだ後）、今川氏十代230年間くらい、南北朝時代から戦国時代の永禄12年（1569）頃まで、今川氏が支配するわけです。この今川氏十代の中でも、この一族というのは決して一枚岩というのではなく、3回にわたる抗争があります。

一つは、ここに出てきます。5代目を継いだ範忠のりただの時に内訌ないこう、家督争いがあります。そして氏親うじちかと義元よしもとがそれぞれ家督を継ぐ時、この3回の大きな戦いがあったことが知られています。この3回を簡単にご紹介したいと思います。

1-3-1 永享の内訌（湯嶋城の戦い）

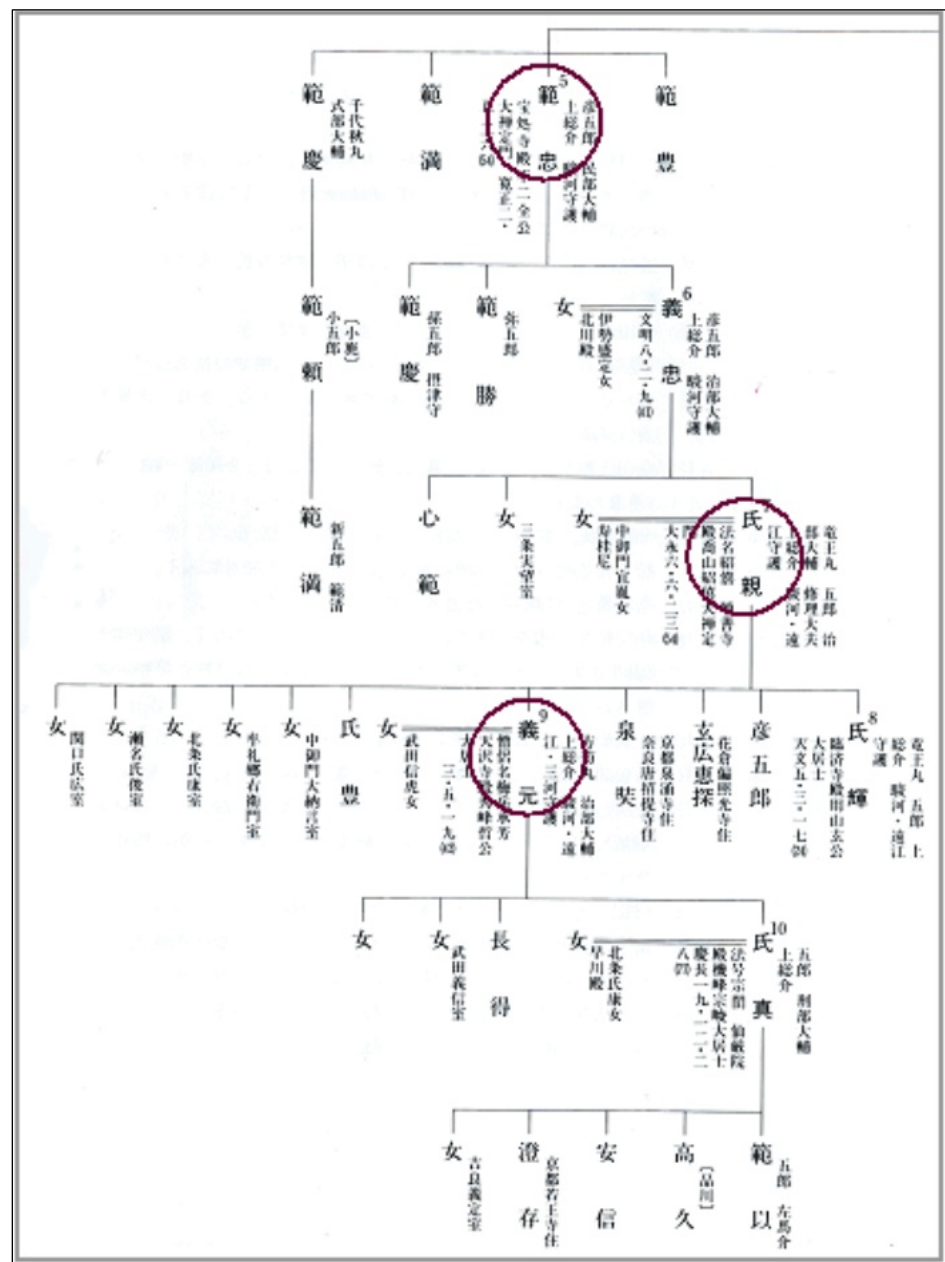
5代範忠と千代秋丸との家督争い

実際に家督を継いだ範忠と対立した弟は、千代秋丸ちよあきまると書いてあります。千代秋丸はのち小鹿氏おじかを名乗り、駅南おしかの小鹿、あそこに住んでいたといわれています。その後の氏親のときも実を言いますと、小鹿範満おじかのりみつに家督を横領されていたので、これを討って出て家督を継ぐわけですが、こういった同じ系列、小鹿一族の中で本筋と争いになるという形態です。

時代が永享えいきょうという年代のことなので、永享の内乱とか、主戦場が湯嶋城ゆじまじょう、安倍川の上流域、湯嶋で戦いがありましたので、湯嶋城の戦いなどと呼んでおります。

なぜ千代秋丸と戦わなければならなかったかという、この時代の室町幕府、京都の将軍家と幕府が、関東を支配するために鎌倉に置いた鎌倉公方くぼうがいます。足利持氏あしかがもちうじなどが有名ですが、持氏と将軍家とがものすごく対立していた。駿河の今川氏というのは、あくまでも幕府側です。ですけど、すぐ隣の伊豆国、甲斐国、相模国というのは逆に鎌倉公方の領地なのです。今川氏のことを、その「境目の重鎮」などと呼んでいます。

千代秋丸が関東公方かんれいの管領の一人、上杉の娘を夫人に迎えています。これが今川氏の家督を継ぐと、将軍家にとって非常に都合が悪い、駿河国を関東管領ないし鎌倉公方にとられてしまう。将軍の権威をもって大軍勢を引き入れ、範忠を支援するわけです。



今川氏系図 →

その戦いのあったところが安倍川の上流域の湯嶋城、現在の油島です。この丸くぼてっとした地形が湯嶋城です。

現在は、行くと開墾された茶畑が広がっています。これはもう15年位前の写真ですから、今はもう手つかずで、茶畑に入れない状態です。そういうところで戦いがあったわけなんです。

湯嶋城（葵区油島）→



↑無惨に開墾された城跡

その時の将軍が足利義教の時代で、このとき義教についていた「黒衣の宰相」といわれた、お坊さんなんですけど、太原雪齋と同じような、すごい力を持った人物が派遣されて記録を残しています。

『満濟准后日記』その中で、「駿河の有力者であった狩野氏が攻めるために湯嶋城を落とした。また奥城という、その奥に城があってそこを攻める」といっています。

そういう場所がどこにあるか、私が所属している静岡古城研究会で色々探したんです。当然、この山中をずっと探しました。近くの俵沢の上に俵峰があります。そこから辺の山もずっと探しましたが、遺構はなかったんですね。

ところが、たまたま私が14年くらい前に、ここへ登りました。この安倍川の反対側、西側の方ですけど、見月山というのですが、標高が1200mもあるんです。この上に山城を見つけました。かなりきつい山で、このときは雪は降るし足はつってしまいで、さんざんな目に遭いました。結局上まではいけなくて引き上げ



↑見月山（葵区中沢・柿島）

ましたが、山城を確認しました。

多分、ここが「奥城」という所であろうと、われわれは仮説を立てております。もしかしたら、安倍城もここであろう、と私は思っております。

狩野氏の本地というのはどこであるか、わかっておりません。今、現在ですね、中河内、西河内、旧・玉川村、あそこの落合という所に、狩野さんという、お医者さんをやってました。ご主人は亡くなりましたが、本家があります。狩野さんというのは中河内とか油島とか、こちらに勢力を持っていた可能性が大です。

ですから城などというのは、やたらよその土地に行って築くなどということはありませんので、多分ここが安倍城の本当の姿だろうと、私は考えています。

1-3-2 文明の内訌（今川氏館の戦い）

7代氏親と小鹿範満との家督争い

2回目の抗争が、今川氏親の時です。

叔父、小鹿範満との戦いです。結果的には、このとき活躍した北条早雲が出てきます。小田原北条氏百年の祖となりました北条早雲は、氏親すなわち幼少であった竜王丸の叔父でありました。竜王丸のお母さんにあたるのが北川殿。北川殿と早雲が竜王丸を支持してくれたんですね。そのお陰で、小鹿範満が家督を乗っ取るような形だったんですけど、早雲が今川氏館にいる小鹿範満を急襲して、家督を氏親に継がせたということで有名です。

早雲が駿河に来て、一番始めに入った石脇城です。これは、焼津のサッポロビール、そのちょっと北側の方に、ぽてっとした所がありますけど、これが石脇城。ここに入っていたという記録が残っています。

結果的には、今川氏館へ北条早雲が急襲したために、ここで大きな戦いがあったわけです。



↑ 今川氏館（葵区大手町）



↑ 石脇城（焼津市石脇）



↑ 発掘された今川氏時代の堀跡

これは、数年前に（駿府公園の）児童会館を撤去して今、史跡整備をしておりますけど、その跡地から今川氏時代の壕ほりが出てきました。これが今川氏館を形成する館空間だと言っていたのですが、たかだか堀は2mか3mです。こんな規模のものではないというのが、私の意見です。

甲府の武田神社に行かれた方はいらっしゃいますか。武田神社にあるのが武田氏の居館です。あれと同規模のものが、ここにでてきていいだろうと思うんです。

発掘地点は今川氏館の回りに集住した家臣どもの屋敷空間であろうと思っています。

児童会館の所から、昔はテニスの所の所ですね。この辺から遺構が出てくるかと思うのですが、静岡市ではそちらの方はやりません（発掘をしない）と言っております。結果的には、一番重要な屋敷空間を見つけられないですね。



↑徳願寺山城（駿河区向敷地）

今川氏館で戦いがありましたが、北条早雲、氏親側うじちかの陣城じんじろがこの徳願寺山とくがんじやまと考えています。

これが弥勒橋みろくばしです。徳願寺がここにあって、この上ほとけだいらが、地元では「仏平」と呼んでおりますが、ここにりっぱな山城が乗っかっています。

堀とか城郭構えとか、要するに、丸子まりこの西の方を監視するのではなく、まるっきり逆側の駿府側に向いているんです。そういうのを考えると、北条早雲が今川氏館を急襲するための陣城にしたのではないかと、私は勝手に位置づけております。

1-3-3 天文の内訌（花蔵の乱）

9代義元(梅岳承芳)と玄広恵探との家督争い

3回目の抗争が、今川義元が家督を継ぐときの天文の内訌。天文年間（1532年～）にありましたのでこう呼んでおります。有名な言い方は「花蔵の乱」といい、藤枝の奥地で戦いがあったことで有名です。

このとき、義元は富士市の善徳寺の喝食でしたので、坊主なんです。僧として梅岳承芳と名乗っていたのですが、腹違いの兄さんが玄広恵探、この二人の間で抗争になりました。これも主戦場になったのは、あくまでも今川氏館です。

これも駿府公園の、違う時の発掘調査ですけど、これも同じですね。幅2mという、ほんの小さい堀が見つかって、あまり迫力のない堀が出てきております。



↑発掘された今川氏時代の堀跡



↑方上城（焼津市方ノ上）

それは別として、このとき、花蔵の乱で功績を残した今川義元派について岡部左京進親綱の軍忠状があります。

まず、焼津の方上城で、戦いがあって、これを落とし、その勢いをかって葉梨城＝花蔵城を攻めた、という記録が出てきております。

葉梨城は、今、第二東名がこういう風に通っています。ここです。

鳥帽子岳がここにありまして、葉梨字「勝谷」という地域なんですけれど。

ここに立て籠もった玄広恵探が支えきれなくて瀬戸谷に逃れて自害しています。

葉梨城→
(藤枝市花倉)



このとき、勝ち組の今川義元派についた部隊が、この葉梨城から2km東側にある岡部町おかべちょうですけれど、天王山系てんのうさんけいと呼んでおります。一角に山城を発見し、「桂島本陣かつらしまほんじん」と名付けました。義元派の陣城にしたのではないかということで話題になりました。



↑桂島本陣 (藤枝市岡部町桂島)

三六 高白齋記
(天文五年) 同五月廿四日夜、
(安広恵探) 花蔵ト同心シテ、
(有度郡) 党久能へ引籠ル、
(輝) 氏照ノ老母、
(今川) 翌廿五日従未明於駿府戦、
(安倍郡) 夜中福嶋

この内証ないこうについては、いろいろ史料に出てきますが、今川氏十代の中でも、一番謎とされている家督相続に伴う抗争なんです。

一つは、『高白齋記』という記録ですが、武田信虎・晴信こまいこうはくさい(信玄)に仕えた駒井高白齋が記した日記です。非常に簡潔に書かれています。

天文5年(1536)ですから、今川氏親の長男、氏輝うじてるが死んだのが天文5年です。これが若くして死んで、一つの謎として、その弟の彦五郎ひごころうも全く同じ日に、二人が同時に死んでいるんです。これも謎の一つなんです。

もう一つの謎が、なんと今川義元の生母、寿桂尼じゅけいにが反対側の玄広恵探げんこうえたんについたということですね。

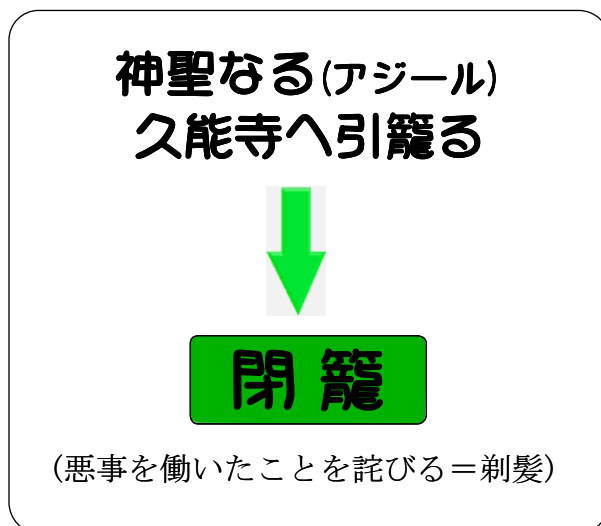
これ、読んでいきますと、

天文5年、5月24日の夜、氏輝の老母、今川義元のお母さん、寿桂尼。これ、「ふくしま」ではなく、「くしま」と読みます。福嶋越前守宿所くしまえちぜんのかみへ行って、「花蔵」というのが負けた方の腹違いの兄で玄広恵探げんこうえたん、福嶋氏の娘がお母さんなんです。花蔵というところの遍照光寺へんしょうこうじというお寺です

けど、そこに居たので花蔵殿と言われていたのです。これが玄広恵探です。寿桂尼がなんと、反対側と同心して(与した)、ということがはっきり書かれています。これは夜行ったんですけど、翌日の朝には合戦があって、その夜中に福嶋党は負けて、久能くのうへ引き籠る、と書いてあります。

ですから、ああいった久能山、久能寺というところが、戦いのときに使われて、逃げる場所になっていたということがはっきりわかるわけです。

1-4 聖域へ引き籠もる→「閉籠」



それを簡単に表現しますと、こういったことになります。

久能寺は聖域です。横文字で言えば、アジールという空間ですね。これは、「へいろいろ」と読みます。閉籠^{へいろろう}というのは、いろんな記録に出てきますが、負けた方が、悪事を働いたことを詫げる。お寺に入って剃髪して、「命だけは助けて下さい」という行動なんです。

ですから、山岳密教系の山の高い所に入るといのは、負けたときに逃げ場所になっている、というのがはっきりわかります。

1-5 歴史シンポジウム・イン藤枝

ちょっと横道に入ります。

この花蔵^{はなくら}の乱を、私が所属する静岡古城研究会では、今年の1月9日から3日間、「歴史シンポジウム・イン藤枝—隠された真実と諸城跡—」というテーマで実施しました。

9日、10日は現地を案内しましたが、いい^{はなくらじょう}天気にも恵まれました。葉梨城＝花倉城から見ますと、焼津から藤枝まで一面、先程^{かたのかみじょう}いいました、方上城も見えました。



↑葉梨城から方上城を望む

静岡大学名誉教授の小和田哲男先生にも3日間つきあっていただいで、現地でレクチャーして頂きました。ここにいらっしゃる方、おわかりでしょ。ひげ生やした、元、藤枝市長さんの松野さんです。

これ、けっこう、ものすごいハードなんですよ。ふうふうして、松野さん、小和田先生ですね。「えっ、こんなところ上がるのか」なんて言いながら、苦勞なさいました。

降りてきますと、ちゃんと地元のボランティアの方々がおいしい汁粉で歓迎してくれました。

小和田先生の嬉しそうな顔、見て下さい。

それで、3日目の11日。「花蔵の乱 一隠された真実と諸城跡一」というテーマで、丸一日やりまして、大きな反響がありました。

200人が入る会場が超満員、ほんと主催者冥利に尽きる、というのはこういうことなんですね。結構難しいテーマでやりましたが、大きな反響の成果をいただくことができました。

ちょっと我々静岡古城研究会の宣伝になりましたけど、いよいよ今日のお話しの本題、核心に触れていきます。今までは付録的なことで、これから本題でございます。



↑指差しをされてる小和田先生(中央)



↑急坂を登る松野さんたち



↑お汁粉の歓迎に舌鼓



↑シンポジウム「花蔵の乱 一隠された真実と諸城跡一」

2 日本の戦国時代とは

まず、一般的にみなさんは、戦国時代の実体を知らないんじゃないかと思います。こういう研究者がいます。渡辺さんという研究者の方ですが、素晴らしい内容のことを言っています。



「戦国時代では、平和は格別のことで非常のことであった。社会のあらゆる次元で、暴力は常に露出していた。すべての者が何らかの攻撃に対して、常に身構えていた。中世戦国とは、ある意味では、身構えた社会と言える。」
渡辺 昌美 『攻撃と防禦構造』より

2-1 戦国時代の重い軍役（公事）

具体的に見ていきますと、戦国時代というのは、いろんな税金がありました。それを「公事」と呼んでおります。その中で一番重いのが、「軍役（ぐんやく・ぐやく）」になります。

封建制度の根源ということで、みなさんは中学かそのくらいの頃、「封建制度」はなんであるかと、お勉強なさったと思います。もうすでに、忘れた方がほとんどだと思います。簡単に言いますと、「御恩と奉公」ということなんです。戦国大名、領主から土地をいただいて、またお借りして、そのお礼に奉公します、という意味合いなんです。

これら公事は村単位に科せられるのです。主に「陣夫役」と言いまして、ようするに戦



う時の兵です。村からかり出されるわけですね。そして、山城を造る時の「普請役」、荷物を運ぶ時の「人足役」などがあります。人足役は二十貫文で一人連れてこい、と出てきます。

戦国大名は村人たちから年貢・公事という税金を収取することから成り立ち、それは村が単位になる「村請」であった。村人一人一人ではなく、村単位でやっていったということです。普請役、軍役などは、みんな何貫文で一人連れてきなさい、そういった、村には税金を課しました。

この時代、特に有名な政策は「検地」です。検地というのはあくまでも兵力をどのくらい集められるかという目的でやったのですね。

村請、村全体で請け負いましょう、ということです。村請は江戸時代の「五人組制度」へとずっと引き継ぐわけですね。

戦国時代には「この村にいるのはイヤだといって、逃げ出してしまう者もいた。そういうのを「欠落」というのです。そういった記録がいっぱい出てきます。戦場に連れて行かれるのがイヤで、逃げてしまうんですね。

領主、戦国大名らは、15歳から60歳まで、一人残らず動員したことが記録にあります。当然、戦国大名は村の戦力に期待したわけです。



3 一大転機をむかえた武田信玄の駿河侵攻

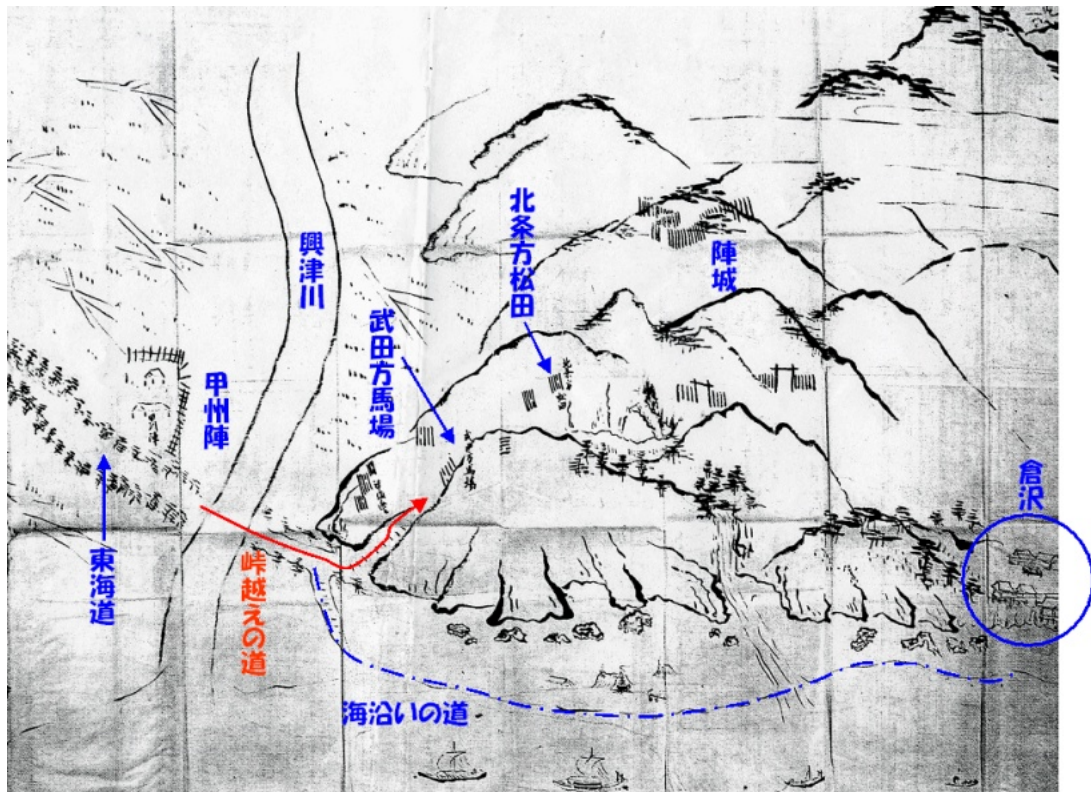


この地方に何と言っても、一大転機をむかえたのが、武田信玄の駿河侵攻です。永禄11年(1568)12月13日に、駿府を占拠します。これから、この地域のものすごい軍事的な緊張といいましょうか、転機を迎えます。

これは、武田信玄が、永禄11年12月10日あたりに国境を越えて駿河国に入ってきます。

←(『図説・戦国合戦集』学習研究社)

3-1 薩埵山の戦い



これは、^{さったやま}薩埵山の戦を描いたもので、これが一番大きな戦いになっております。

ここは薩埵山です。これが、^{おきつがわ}興津川です。

薩埵山の高い所に、こういう柵がいっぱい築いてあります。^{じんじろ}陣城です。これは今川氏と同盟を結んでいた小田原北条氏が援軍として布陣した様子です。ちょっと後ろの中央に「北条方^{まつだ}松田」と書いてあります。それで、下の方は「武田方^{まば}馬場」、下からこう駆け上がっていく。

それで興津川をはさんで、反対側に「甲州陣」と書いてあります。これは^{よこやまじょう}横山城のことなんですね。

これが東海道。それで、面白いのは、よーく見てください、東海道薩埵峠越え。今、ハイキングコースとして整備されて土日になると、いっぱい歩いています。あれは江戸時代につくられたものです。

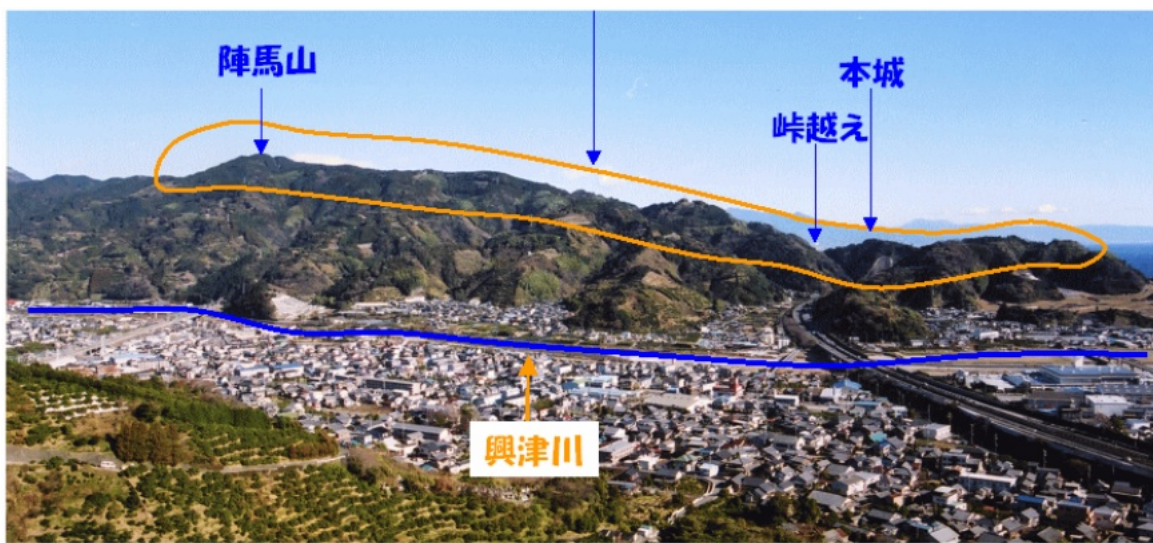
これは戦国時代の様相を表している絵図なんです。

街道が山沿いに一つ行っています。これが^{ゆい くらさわ}由比の倉沢です。これが、薩埵峠越えなんですね。これが江戸時代にも使われましたのですが、江戸初期に朝鮮通信使

に通ってもらうために、景色のいい所、海側に道をもう一つ造ったんです。これを行くと富士山が見え、そういうことで造ったんです。

このところに、薩埵峠^{きった}越えする道と、海の方へ行く道がありますね。記録見ますと、ここに「くきがさき」というのがあって、海の水が引いたとき、簡単に渡れると書いてあります。ところが、みるみるうちに潮が満ちてくると、危険でしょうがない、といった記録が出てきます。ですから当然、山道と引き潮のときには行けた道とがあったと言われております。

薩埵山に布陣



武田信玄が侵攻のときも、ここで、先程見て頂いた薩埵山ですね、ここへたった一日遅れで、小田原北条氏が今川氏の援軍として来ています。薩埵山のずうっと稜線上に四万五千もの兵ですよ、布陣してきた。そして、武田信玄も駿府を占拠していたんだけど、これはいけないということで、兵を引き返して、興津川をはさんで、なんと四ヶ月くらい対陣しています。

それで、ここ、私が12年くらい前、4年もかかって全山、



↑江戸時代の薩埵峠越え 「本城」

調査しました。そうしたら、
^{ひがしほりきり}「東堀切」、^{にしほりきり}「西堀切」、
^{じんば}「陣馬」とかですね、
^{じんばぐち}「陣馬口」、^{くるわ}「曲輪」、
^{ほんじょう}「本城」という城郭地名が
出てきました。そういうと
ころにきちんと堀とかが残っ
ておりまして、びっくりし
ました。



↑陣馬地名の大空堀

これは朝鮮通信使を招待
するために開いた峠越えで
すね。ここのところが、
^{ほんじょう}本城という地名があります。りっぱな山城が乗っています。この場所が、ここで、
山越えと海側の道を両方押さえられる要地です。

もう一つお見せしたいのが、^{じんば}「陣馬」という地名のところの、こういった、幅が2
0mくらいあります。これは小田原北条氏得意の堀の造りです。この一番高いのが、
^{じんばやま}陣馬山と呼んでいます。足利尊氏も入ったようです。これが、中心部分なんですけ
ど。この尾根を下がって行くと、武田方の中心的な陣城である^{よこやまじょう}横山城へ行きます。
ですから、この尾根が大事なところですけど、これを遮断するために築いたんです
ね。

この城へ入っていった武田方の武将が、^{あなやまのぶきみ}穴山信君、^{ばいせつ}出家して梅雪、この戦いの時、
面白いことを言っています。「どうも、小田原北条軍というのは4万以上の兵を連
れているのに、山に布陣しているだけで、全然戦おうとしない、下に降りてこない、
どうも、これはおかしいぞ」と、言っています。

それで、武田信玄が、こういった泣きべそをかいていますよ。皆さんには知られ
ておりませんが、信玄が、「こんなことしていると、武田氏は滅亡してしまう」
という内容です。

4ヶ月間もここに釘付けされていると、小田原北条氏が背後から突いてくれ、と
いって越後の上杉謙信に毎日のように手紙を出して、背後から挟み撃ちにする、そ
ういう作戦だったんです。それにまんまとはまったのが信玄。このままだと武田氏
が滅亡してしまう。これを打開するために、同盟関係にあった信長に頼まないとダ
メだと、そういうことも、一時、信玄もやばいことがあった、ということが知られ
ております。

3-2 信玄が今川の家臣に宛てた書状

三六 武田晴信判物 高橋義彦氏所蔵文書
(懸紙ウ、書)
 「安東織部佑殿 信玄」

定

一 八拾貫文 興津振津守分 (駿河国安倍郡) 河辺村
 一 五拾五貫文 糟屋弥太郎分 (庵原郡) 瀬名川
 一 参拾六貫文 糟屋備前分 (庵原郡) 細谷郷
三浦熊谷分
 一 五拾貫文 由比大和守分 (安倍郡) 鉢谷
 一 百貳拾貫文 本地 (安倍郡) 菖蒲谷

都合参百五拾貫文

今度朝比奈右兵衛大夫忠節之砌、令用心瀬名谷江被退
 条神妙之至候、仍如此相渡候、猶依于戦功可宛行重恩
 者也、仍如件、

永禄十二巳年 (武田晴信)
 正月十一日 信玄 (花押)

安東織部佑殿

↑信玄の書状 その1

そういう4ヶ月間も戦っている真っ最中に、武田信玄が今川氏の家臣であった
あんどうおりべのすけ
 安東織部佑に対して、こういうことを言っています。

「このたび、朝比奈信置あさひなのぶおき (今川氏の重臣)、忠節之砌瀬名谷へしりぞかれ神妙に
ちゆうせつのみぎりせなだに
 いたりそうろう。」

要するに、今川に忠節を尽くした連中が、瀬名谷へ入って明け渡し、そこを武田方の陣所にした、ということです。

これを細かく読みますと、瀬名川せながわには武田氏へ従属しなかった、糟屋弥太郎かすややたろうという人物がいた、ということが知られています。

安東織部あきたおきべ佑の本地は、菖蒲谷しょうぶがや（しょうぶがだに）、これが昭府町しょうふちやうです。ここに本地があったことが知られています。

三六一 武田晴信判物写
○判物証文写武田二内閣文庫所蔵

定

一 平嶋之内（駿河国志太郡） 式拾四貫

一 大覚寺方 式拾六貫

合五拾貫文

今度朝比奈右兵衛大夫忠節之刻、令同心、瀬名谷（駿河国庵原郡）へ引退之条、神妙之至也、因茲如此出置候、猶依戦功、可宛行重恩者也、仍如件、

永禄十二年己巳 正月十七日
（武田晴信）
（花押）

青嶋五郎兵衛尉殿

↑ 信玄の書状 その2

こういったものを、武田信玄は乱発します。

藤枝と島田の境を本地とした青嶋五郎兵衛尉あおしまごろうびやうえのじやう、これに対して同じように、朝比奈信置あさひなのぶおきに仕えて、その寄子よりこですね。

「同心して瀬名谷せなだにへひきこもって、同じようにやった」ということが書いてあります。

三五 武田晴信書状写 甲州古文集

定

今度葛山備中守殿忠節之刻、令同心、(駿河国庵原郡)瀬名谷へ被引退
条神妙候、因茲由比山方内、(庵原郡)助太郎分六拾貫文之所進
之置候、弥可被抽戦功条可為肝要候、恐々謹言、

永祿十二年己巳

二月廿四日

(武田晴信)
信玄

荒河治部少輔殿

↑信玄の書状 その3

武田信玄が来ると、真っ先に武田氏に従属した、すそのし かずらやまびつちゅうのかみ裾野市の葛山備中守。同じように瀬名谷へ入って、その寄子である家臣のあらかわじぶしょうすけ荒河治部少輔に対して、「ご苦労さん、うれしいよ」ということが出てきます。

3-3 安倍の一揆衆

そういう中で、オレは武田につくのはイヤだといって、安倍郡あべ一帯、そして藤枝ふじえだとか島田しまだの方で、あちらの有力者も武田につくのはイヤだ、といって一揆をおこしています。「安倍の一揆衆いっしきしゅう」と出てきますが、これがすごく貴重な資料なんです。その戦いの模様がちゃんと書いてあります。

永禄12年（1569）の2月ですから、武田信玄は薩埵山さつたやまの戦いの真っ最中ですね。小田原北条氏と釘付けになっている状況です。そういう中で、井川いかわの海野宗定うんのむねさだ、見条けんじょうとか南条なんじょうとか、安倍奥の人物で、村の有力者です。小田原北条氏に対してこういうふうに書いてあります。

「府内には甲州の人数、これなきそうろう。しかるは牛妻うしづま、津々野つどの、敵はひきこもり、安倍口あべぐちの関所、つかまつりそうろう間、御旗本を待ちかねそうろう。」

小田原北条氏の旗本を待っているよ、ということですね。

「我々は井川の、安倍の一揆中、今月5日、津々野へとりかけそうろうのところ、朝比奈あさひなとか、津々野えんどうとか、遠東とかいう人物を討ち取った。」

「小田原北条方の御旗本の待ちいり候。」

有力な者たちに早く、安倍郡へ来てほしい、と書いてあります。一刻も早く大將クラスを府中ふちゅうへ、お待ちしております、と書いてあります。

そういう状況の中で待ちきれなかったのか、

「ただただ今月の6日、武田信玄が数を3千ばかり整えて、安倍口へ動きそうろうあいだ、この一揆中、みな山々へ閉じ籠もりそうろう。」

興味深いですね。さんざん待ったんだけど、武田信玄が兵を整えて、安倍郡へ攻めてくるために、みな山へ閉じ籠もった、これが、今日ポイントになってきますので、覚えておいて下さい。

三二七 宗定等連署状

南条文書
○静岡市渡

去月廿七日、從小田原(相模國)さつ田(薩摩)とらせられ、同日信玄(武田晴信)諸軍興津(庵原郡)へ悉つほ(駿河國庵原郡)ミ、日々御手合候之間、府内ニハ甲州(後北)之人数無之候、然而牛妻・津々野ニ敵を引籠、安部口(河)之けつ所仕候間、御旗本を待かね申、井河・安部之一揆中、今月五日津々野へとりかけ候之処、朝比奈(元徳)八郎兵衛殿を始として、津々野東左衛門父子・遠東兄弟、其外甲州之人数相こもり候、しかしながら各てをくたき終日たゝかひ、八郎兵衛殿をさきとして十余人討取、其外手おひ候て敵方(敗)はい軍仕候、已後御はた本の物主をまち入候へ共、於其口も御動故か、いまに御加勢無御座候、一刻もはやくいくさの大將を府中へこし御申候者、山々の一揆中可罷出候間、当日二三十之可為御人数候、甲州自境目告来如申候者、景虎(上杉)信州へ発向必定ニ御座候間、興津之諸軍可為破軍候、尚々今月六日、信玄之御人数三千計、安部口へ相動候間、此口之一揆中、山々へとちこもり候、其口之御行承届いづれもあんとを給候、早々被御申上府内へ之御動可然候、此等之趣御披露所仰候、恐々謹言、

二月十八日

宗定(花押)

伊波大隅守殿
人々御中

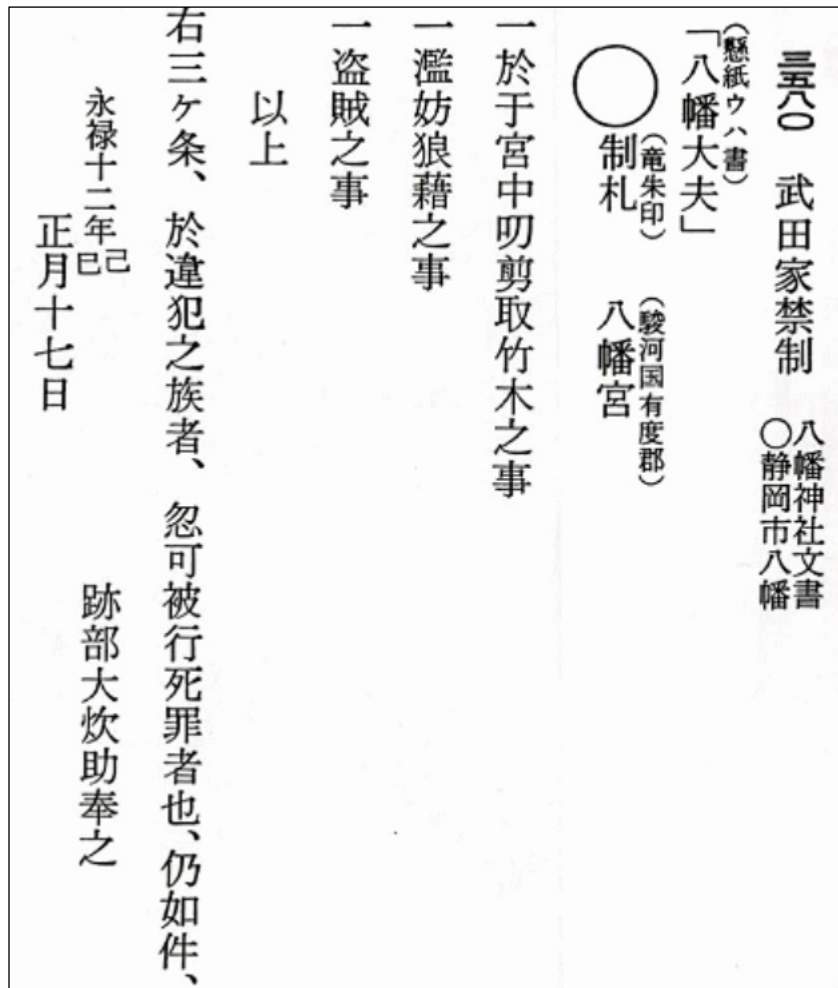
小泉

見条

南条

五(郎左)衛門

3-4 寺社に逃げ込んだ村人



永祿12年の正月、本当に対峙している中で、武田の家臣の跡部あとべが、駅南の八幡神社やはたじんじゃに、禁制きんぜい、制札せいさつを出しています。この八幡神社の境内の竹や木を伐ってはいけません。乱暴狼藉らんぼうろうじやくをしてもいけない。盗賊たうさく、盗人たうじんをしてもいけない、と書いてあります。そんなことをすると死罪、首をはねるよ、ということですね。ということは、この神社の中に誰かがいたわけですよ。

武田信玄が滅亡する1ヶ月前、武田領である駿河に徳川家康が軍事行動を起こした。藁科川沿いの建徳寺たきょうじという有名なお寺さんがありましたが、そこにも禁制きんぜいを出しております。

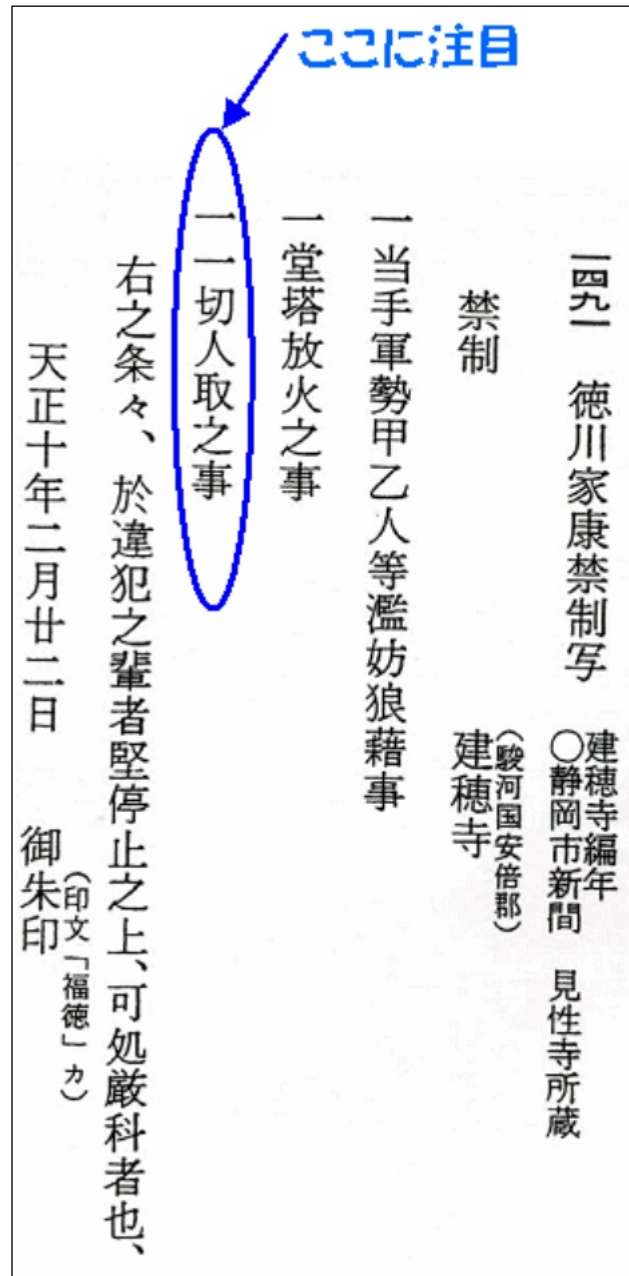
家康の禁制は、「略奪、乱暴狼藉、放火をしてはいけない」、寒い時ですから、木を取って薪にするんでしょうかね。

それで、ここの三つ目を見て下さい。これが貴重なんです。

「いっさい人取（ひとどり）の事」

人を連れてってはいけない、言い換えれば奴隷狩りが行われていたんです。

略奪行為、火を付けてもいけません、そして奴隷狩りをしてはいけません、とはつきり言っています。そういうことをしたら、首をはねると記しています。



寺社に逃げ込んだ村人は
「制札銭」取次銭」により
身の安全を銭で買った

禁制きんぜいの性格というのは、こういうことなんです。

「制札銭せいさつせん」「取次銭とりつぎせん」、これを読んで頂ければわかります。

要するに、大きな神社とかお寺さんというのは、村人がいたんです。その人達を守るために、村の有力者、江戸時代で言えば名主さんとかそうした人達がお金を払って、武田氏が来れば食料も提供して、そして、村人たちを助けてやった、ということです。要するに、一筆書いてください、ということです。

4 日本の合戦は雑兵たちの働き場

焼き働き・刈り働き・乱取

//

この三点セットは雑兵たちの特権であった

4-1 雑兵達の三点セット

ポルトガル人宣教師のルイス・フロイス

日本での戦いは、いつも米や小麦などを奪うためのものであった

ポルトガル人の宣教師のルイス・フロイスが、こういうことを言っております。面白いことを言っております。「日本の合戦、戦いはおかしいよ。殺戮戦、殺し合いをするような戦いではない。米や小麦などを奪うための戦いであった。」

乱取

連れて行かれる兵士の9割くらいが雑兵ぞうひょうとか、地下人じげにんと呼んでおりますけど、身分の低い連中が村単位で連れて行かれるんですね。そういう連中が悪いことをするんです。それを「乱取らんどり」と言います。この乱取というのは、勝った方の兵がみんな敵の所で悪いことをするんですね。

藤木 久志(著) 『雑兵たちの戦国』
飢えと戦いに つきまとわされた時代であった
(飢餓と戦争が日常化した社会・・季節的に)

私が尊敬する藤木久志^{ふじきひさし}さんが『雑兵たちの戦国』（朝日新聞社）の中で、こういう事を言っています。「戦国時代というのは、飢えと戦い、飢餓と戦争が日常化した世界」と書いております。これらは、戦国大名同士が戦いになった「草刈り場」という戦場になった地域ですね。

また、藤木さんはこういうことも言っています。

「日本の合戦は、雑兵達の働き場であったんだと。もう、食う物も食えない、みんな死んでいってしまうような中で、雑兵達の働き場であった」と伝えております。

要するに、雑兵達には「焼き働き・刈り働き・乱取」という三点セットとして、特権が与えられたわけですね。

戦国時代の落首の中に、こういう事がいわれています。

「夜討ち・強盗・山賊・海賊は世の常のことなり」

とあり、あたりまえのことだといっております。

そして興味深いことに、乱暴狼藉という背景には、プロが介入していたんです。雑兵達が人取りをしてきても、後ろで後処理してくれないと困るんで、後ろでプロが待っているんです。それは、本当ですかということが、これからの資料の中にきちんと出てきます。



義元の敗因

それより四年目、庚申のしかも七かうしんある年の五月と申に、信長廿七の御歳、人数七百計にて、義元公の人数二万計にて出給ふを、見きりをよくして、駿河勢の諸方へ乱取にちりたる間に、身方のやうに入まじり、義元公、三川の国の出家衆と、路次のわき、松原にて、「敵ハなきぞ」とて、酒盛してまします所へ、切てかゝりて、則、信長公のうちかつて、義元の御くびを取給ふ。此一合戦のてがらにて、日本に其名ハかくれなし。

その前に乱取について、^{こうようぐんかん}『甲陽軍鑑』の中に興味深く出てきます。

今まで今川義元おけはざまの桶狭間の戦いの敗因はなんであったか？みなさん、うすうす聞いたことはありますね。2万以上の今川軍がたった2千か3千の信長の兵に討たれ

てしまった。それは迂回作戦による奇襲攻撃であったとっていますが、そんなことは全然違うんです。

これを見つけたのは、東京大学の黒田日出男教授くろだひでおです。今川義元の敗因がこれであったと、ちゃんと書いてあります。

これ、読んでいきますよ。

信長二十七の御歳、人数七百ばかりにて、義元公の人数二万ばかりにて出たまうを、みきりをよくして、駿河勢の諸方へ乱取にちりたる間に、（守備兵が勝ち戦に酔っていた時、兵が乱取に走ってしまったそういうところに）、味方のように入り交じり、義元公、三河国の出家衆と、路地の脇、松原にて、「敵はなきぞ」として、酒盛りしてまします所へ、切りかかりて、則ち、信長公のうち勝って、義元の御首を取りたもう。

要するに守備兵が乱取に走って、手薄になったところを、そこをうまくついた。まさか敵が来るとは思わなかった。味方のような振りをして討ち取った。『甲陽軍鑑』ですから、江戸時代初期に最終的に成立したもので、これが100%間違いないとは言えませんが、一つの記録として興味深いことですね。乱取は、あたりまえのことであったようです。

それと、黒田教授が言っておられて面白いことは、この時代の戦いというのは、日の出と同時に始まって、昼に終わる。90何%は昼になると勝敗が決まって、勝ち組は乱取に、ワーッと分捕りに行くんです。ですから今川氏たちは、あたりまえのことをやったんですね。そういうことが当時の記録に出てきます。

5 『妙法寺記』が伝える甲斐国

5-1 全国規模の大飢饉

いよいよ本題に入ります。『妙法寺記』みょうほうじきという記録があります。これは武田領の、富士五湖の一つ、河口湖かわぐちこの近くに妙法寺さんというお寺のぶとらがあって、これが武田信虎・信玄の時代の記録を事細かに記録しております。あの時代が、どういう時代であったかというのが、これからの本題で、ほんとうに興味深いものです。

天文ツチノエ戌

〔七年〕

此年正月十七日夜大風吹候而、其後二月三月大風度々吹申候。去間冬ノ寒ニ大麦ヌケ候而一向

〔一〕

〔キ〕

〔チ〕〔武〕

〔サムサ〕

無御座候。此方ニ不限大原モ皆損シ無御座候。此春モ皆人餓死致シ候而ツマル事無限。

〔カイン〕

↑ 妙法寺記その2

天文五丙申

〔年〕

閏月十月。此年正月暖氣ニ御座候。事イ畑ニ降申候。正月十四日夜大風吹候而、皆皆家ヲ損シ申

〔奈イ細々ニリ〕

〔ソシサレ〕

候。此年二月十一日小林和泉殿死去。此年四月十日駿河ノ屋形御兄弟死去被食候。去程ニ其年六月

〔タンキ〕

〔被食候〕

〔一〕〔一〕

八日花倉殿福嶋一門皆相模氏繩ノ人数カ責コロシ被申候。去程ニ善待守殿屋形ニナホリ被食候。

〔殿〕

〔ナ〕〔一〕

〔綱〕〔被食候〕

〔ナシ〕〔寺〕

〔ヲ〕

此年五月ヨリ七月迄雨降候而言語道断餓死。殊更、疫病ハヤリ申候。此年六月当国府中ニテ前嶋

〔マテ〕〔フリ〕

〔至シ候〕

〔一〕

一門皆上意ソムキ腹ヲ切申候。去程ニ一國奉行衆悉他国へ越被申候。此年浄泉ノ田地ヲ六郎左衛

〔リ〕

〔一〕

〔一〕

門殿請取被申候。此年小林刑部左衛門殿、松原サキヲ屋鋪ニ御立候。次ニ相摸ノ青根ノカラヲチ

〔承〕

〔模〕〔アヲネ〕

ラシ被食候。足弱ヲ百人計御取候。蓮真坊寺焼申候。

〔シ〕〔ヨハ〕

↑ 妙法寺記その1

天文5年(1536)、これは先程紹介しました、駿河では今川義元が家督を継ぐ、
はなくら
花蔵の乱があった時代ですね。

「さる年の六月、花蔵殿、福嶋くしま一門、みな相模氏綱さがみうじつなの人数を攻め殺しそうろうに
して、善待寺殿ぜんたくじ、これは今川義元のことですね、親方になった。」

そういうとき、甲斐国かいのくにではどういう状況であったか、ということが書いてあります。
す。天文5年のこの年、まだ信虎の時代です。武田信玄が家督を継ぐのはこれから
5年後です。

「この年正月、暖気ござそうろう、正月14日夜、大風吹きそうろうにして、みな
みな家を損し申しそうろう。」

「この年5月より7月まで3ヶ月間、ずうーっと雨が降っていた。言語道断、餓
死。さらに疫病がはやった。」ということが出てきます。

「天文7年(1538)、この年正月十七日夜、大風が吹いて」

台風でしようかねえ。

「その後、2月、3月大風度々吹き申しそうろう。この春もみな、餓死いたしそ
うろうにして、つまること限りない。」

無限だよ。何人死ぬかわからない。

もうひとつは、富士吉田ふじよしだのあたりのことを言っています。天文14年(1545)です
から、武田信玄の時代です。

「この年正月、度々大風吹いて、あまりの不思議さに書き申しそうろう。この年
の春、人々つまること無限、限りなし。2月11日、富士山より雪解け水が吉田を押
しかけ、人馬とも押し流し申しそうろう。特にその水、下吉田の冬水の麦をことご
とく押し流し申しそうろう。あい残し申しそうろう、大豆とか小麦はいいのだけれ
ど。その年の5月、6月、7月の3ヶ月間、雨が一滴も降らない。」

そういう中で、その年、武田信玄は信州の箕輪城みのわじょうを攻めた。片方では餓死者がいっ
ぱい出てくるのに、武田信玄はせいせい敵を攻めているわけです。

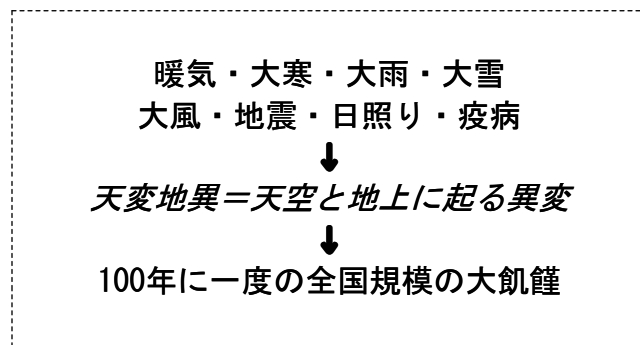
天文10年(1541)、武田信玄が家督を継いだ年です。

信玄が自分の親・信虎を「駿河国へおしこし申しそうろう。」

これは、親父は悪業のかぎりでどうしようもないから追放したと書いてあります。

「この年、春、餓死そうろうにして、人馬ともに死ぬること限りなし。百年の内
にも、ござなきそうろうと人々申しきたりそうろう。千死一生と申しそうろう。」

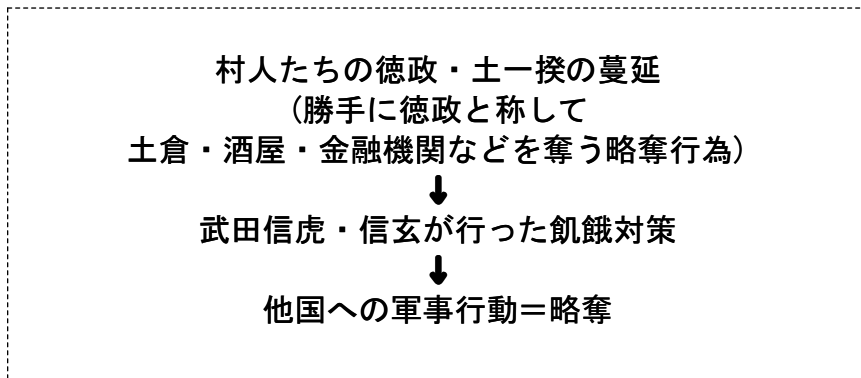
これは、どういうことでしょうかね。



この時代、実を言うと、色々な資料を読みますと、皆さんの資料にはちょっとありません。この天文年間、天文9年から11年までの3年間は、列島的な大飢饉、飢餓だったということが知られております。永禄3年から9年までも、関東方面もかなりの飢餓状態だったということが知られています。そして、今川義元が桶狭間へおけはざま侵攻したとき、駿河国あたりするがのくにもそういう状態だったことが知られております。

暖気、大寒、大雨、大雪、大風、地震、日照り、おまけに疫病もはやったと言うことですね。もう天変地異、日本列島規模に異常気象が起きたということです。ここにもうたっているとおり、百年に一度の全国規模の大飢饉がおきたことが知られております。

5-2 村人たちの徳政・土一揆の蔓延



食べていけないんだから、しょうがないんだ、と。これは、言い換えればこういうことになりましょう。武田信虎・信玄の時代に行われた飢餓対策、徹底的にやったのはこういうことです。

これは、過日起きました大地震と似ていますね。ハイチの大地震では20万人位、死んだといわれています。津波で死んでおりますけど。この前のチリ地震、みんな略奪してましたですね。スーパーとか行って盗んでね。現代にも伝わってくるようなことがわかるわけですね。

5-3 武田信虎・信玄が行った飢餓対策

またまた、小さい字で申し訳ないんですけど、少し読んでいきます。

天文15年（1548）、武田信玄のことが書かれた『妙法寺記』^{みょうほうじき}のことで

「この年七月五日、大雨が降って大洪水、この近くの山崩れ、田畑をことごとく押し流し申しそうろう。田地、ことごとく押し流しそうろう。また、十五日夜、大風吹いて。」

この辺にいきますと、「餓死至りそうろう」。

そういう天文15年のとき、武田信玄が何をしたかという、なんと、信州佐久郡志賀城^{しがじょう}を攻めて、ことごとく討ち取った。その数がここに出てきます。

さるほどに男女生け捕りなられそうろうにして、ことごとく甲州へひきこし申しそうろう。さるほど、に二貫、三貫、五貫、十貫にしても、人はうけたまわりそうろう。

要するに、いわゆる身代金をとる訳です、殺しちゃうわけではない。2貫から10貫の間にうけたまわりそうろう、返したよ、ということです。しかし、身代金を取れないとき、どうするかというと、海外へみんな売り飛ばしてしまう。だから戦国時代は、いろんなところに、特に東南アジアへ輸出したということが、他の記録にあります。

天文21年（1552）、今川義元の娘が武田信玄の長子である武田義信^{ただよしのぶ}のところへ嫁ぐことになった。

この年、信州働きそうろう。小岩城^{こいわいじょう}を攻めて落とし、とった首が五百、足弱^{あしよわ}とること数を知らず。

「足弱」という言葉が出てきました。

禁制^{きんせい}、集落に行くと、お寺とか神社がようするに避難場所になっていたのです。そこには足の弱い人がいたということです。表現的には悪いですけど、女子ども、老人、そういう人を連れてってしまふ。そうして身代金を要求して、返す。そういうひどいことをしてるんです。

ここには山梨県の方はいらっしゃらないですね（笑い）。武田信玄のことを、神様、みたいなことを言っているようですが、私は「武田嫌い」なもんですから（笑い）、地元ですから「今川びいき」で話をしたいです。

こういうことを平気でやってるんですよ。武田氏の悪行的な一面が出てますね。

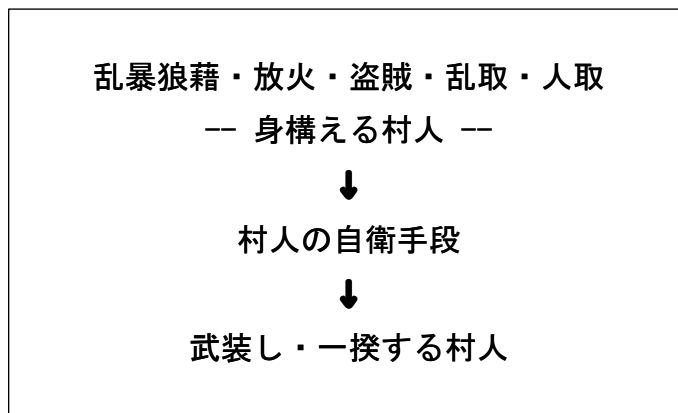
天文十五年（一五四六）『妙法寺記』下

此年七月五日大雨降、大水出、此近辺山クツレ候而、田地作毛悉押流シ申候。殊ニヲタレノ
田地悉オシナカシ申候。又十五日夜大風吹候而、作毛悉吹コホシ申候。去程ニ世間悉致餓死候
而不及言語ニ。去共売買安シ。此年信州佐久郡シカ殿城ヲ甲州ノ人数信州人数悉談合被成候而取懸
被食候。去程シカ殿モ随分ノ兵共ヲ御持候。又常州ノモロオヤニテ御座候高田方シカ殿ヲ見繼候
而、城ヲ守リ被食候。去程ニ又常州随分ノ旁高田ヲ見付候而、浅間嶽廻御陣ヲ取候。去程ニソ
レヲ目懸候而、板垣駿河守殿、甘利備前守殿、横田備中守殿、多田野三八殿、其外向軍被成
候。去程ニ常州人数切劣候而、名大将十四五人打取、雑人三千計打取、此首ヲシカ城廻悉御
懸候。是ヲ見テ要害ノ人数モ力ヲ失ヒ申候。去程ニ城ハ水ニツマリテ常州人数ト合戦ハ八月六
日。シカ要害ハ八月十一日。依田一門高田一族シカ殿御内ヲハカロウ平六左衛門尉兄弟八人。
去間以上打死三百計。シカ殿御上ヲハ小山田羽州給テ駒橋へ御同心申候。去程ニ男女イケトリ被
成候而、悉甲州へ引越申候、去程ニ二貫三貫五貫一貫ニテモ身類アル人ハ承ケ申候。

天文廿一壬子

此年正月廿三日、小山田出羽守殿死去。同廿五日申尅送葬。御供人衆一万人ニ而送り被食候。次法華宗、郡内一番ノ御弔被成候。此年正月風モ不吹暖ニ御座候。此年七月御本寺ヨリ御大事ヲ越申候。去程ニ談義被成候而、其上御本番ヲ懸申候。信心ノ男女出家賽銭ヲ薙候事申々言説不及候。悉ク壁ヲ打破申候。去程ニ皆感涙ヲ流シ候。其上若キ出家衆十六人ニ坊号ヲ授候。後代ニハ有間舖候間書付候。此年信州御働候。小岩兵部雲戒ヲ責落シ被食候。打取首五百余人。足弱取事数ヲ不知。此年吉田友屋ニツケ塚ノ宮内左衛門殿屋形御蔵ヲ被立作。去程ニ当寺ノ御本番ヲ此年菊月八日造り申候。本願ハ本行坊日祐取立申候。同ク鬼子母神ヲモ造申候。此年弥八方友屋ニ家ヲ廿四坪ニ作り被申候。此年草生ハ廿分ニ越申候カ。風不吹オクテハ能御座候而、作毛ニ不入実候。此年霜月廿七日駿河義元御息女様ヲ甲州暗信様御嫡武田大吉殿様ノ御前ニナホシ被食候。去程ニ甲州一家国人ノキホヒ不及言説候。武田殿ノ人数ニハ更ニ熨斗付八百五十僕。義元殿人数ハ五十僕御座候。與十二挺。長持廿カラ女房衆ノ乗鞍馬百疋御座候。兩國喜大慶ハ後代有間敷候。其内ニモ小山田弥三郎殿一國ニ而御勝レ候。

5-4 武装し、一揆する村人



敵が攻めてくれば、乱暴狼藉、放火、盗賊、乱取、人取。

信州の人達もそうだと思うんですけど、農民、村人たちは当然身構えますよ。どうしたらいいんだと。「武装し、一揆する」というのは、江戸時代の一揆ではありません。要するに、同じ事を一団となってやりましょう、ということです。考え方を一にした人達が集まることを、一揆と呼んでおります。こういうことを村人の自衛手段としてやりました。史料的に、ちょっとご紹介しましょうか。

これは直接、静岡県にはないんですけど、こういった史料が、出て来ております。武田氏の時代、清水しみずの江尻城えじりじょうにいた穴山信君あなやまのぶきみが記したものです。

大井川の中流域の水川みずかわ（前の中川根町）という所で商売をなささい。そこは、「半手はんて」というところですよ。

半手の地とは、ここは武田領だけど武田領じゃない、家康領だけど家康領じゃない、ということで、地元の村人達は年貢とかを両方に払っていたんです。そうしないと攻められてしまう、そういう所を半手の地といいます。

そこで、こういう風に商売が成り立つ訳ですね。この辺にずっと名前が書いてあります。松木とももの、伴野たちは、旧今川氏に認められた豪商たちです。一つ書きで興味深いことを伝えていきます。

「水川郷において、河端で出合って商売をなささい。」

これを素直に読みますと、「償銭つぐないせん」と読むんですか、取り替えること、と書いてありますね。これは別名、「迷銭まよいぜに」とも言うそうです。これは何か、「取り替える」、すなわち人質を交換したということです。ああいった所で、徳川方に取られた雑兵を取り返す、そういう所で行われました。

それで、面白いのは、二番目の所ですけど、

「一つ、敵方より、鉄砲並びに鉄を相違なくいだす事。馬を二百匹～三百匹用意するよ、ということです。」

敵方より、鉄砲を仕入れなさい、それが主な目的です。そのために、馬を200から300匹ですよ。相当な武器を、こういった所から供給してたと言うことですね。

五四三 穴山信君判物写 判物証文写今川二 ○内閣文庫所蔵

定於半手商売之事

一出合之様子、償錢如取替、於水川之郷、互河端へ出合可商売事
一自敵方鉄砲并鐵無相違出之候者、式百疋三百疋之夫馬可遣之事
一書付之外之商人、商売可停止之、若違犯之族、見合荷物等可奪捕事
右、守此旨、自今以後可商売之者也、仍如件、

九月晦日

信君(穴山)
(花押)

松木与左衛門尉殿(宗清)

畠河次郎右衛門尉殿(次久)

山本与三左衛門尉殿(長徳)

星野七郎左衛門尉殿(久次)

市野利左衛門尉殿(秀忠)

太田四郎左衛門尉殿(盛憲)

山地孫兵衛殿

大西茶右衛門尉殿

多喜二兵衛殿

伴野次郎兵衛殿

6 愛鷹山中の山小屋

6-1 史料に出てくる山小屋

それでは、だんだん本題に入っていきます。

村人たちはどういう行動に出たのだろうか、ということが面白い史料があります。これ長文なんです。

元龜3年(1572)8月、武田信玄が三方原みかたはらの合戦へ出て行く前のときですね。信玄が出馬すると、どうも家康が信長を頼って、信長が兵を出してくるから、伊那谷いなだにから天竜川の上流域のいろんな土地に守備をしなければいけない。そこには有力者とか村人とかいるので、こういった手だてをしろ、ということです。

保科筑前守ほしなちくぜんのかみは、高遠城たかとうじょうの城主です。ここの城へ人質を入れておけ、ということです。

「地下人じげにん」のことは、地下人とは土着の百姓一般のことです、雑兵達ぞうひょう、そんなことでいいと思います。これらが何するかわからない、と書いてあるんですよ。

「疑心やからの輩は、妻子を高遠城へ人質に入れておけ、その他の地下人は嚴重に誓約書を取って申しつける。」

そういった人質として高遠城へ入れておきなさい。

そしてなおかつ、

「逆心の輩と想定するような輩がいたら、しからは、山小屋へ入れておきなさい、閉じこめておきなさい。」

これが「山小屋」です。

これは、どういう事かと言いますと、村人達はけっこう悪いことをするんで、主立ったやつらの妻子を、高遠城へ人質として入れなさい。他の連中は裏切るかもしれないから、山小屋、集落背後の山中に、そういった村人が管理する小屋、イコール山城ですよ、そういう所へ入れておきなさい、ということです。これが、「村の城」なんです。

五三 武田家朱印状

古沢正臣氏所藏文書
○山梨県

覚(宛朱印)

一 今度有首尾向遠州出馬企、一 大事之行候之間、暫可
為張陣候、然則必就家康訴訟、信長・木(徳川)「曾者伊奈(織田)
國」可及後詰与、(貼紙)□□郡上下之貴賤兼日成其覚悟、
大細共ニ守典(武田信豊)既下知并玄德齋・保科父子異見、抽忠
節候之様可被申付事

一 為。始(信濃國)松尾、下条・春近衆主人之儀者不及是非、家中
(信濃國)之乙名敷者并親類繁多之族妻子、悉(信濃國)高遠へ可召寄
事

一 地下人之事者、以案内者令糺明、或疑心之輩或親類
広き族計妻子高遠へ召寄、其外之地下人ニ者嚴重ニ
誓詞被申付、不可企逆心之旨被相定、然而山小屋へ
入、或敵退散(貼紙)一砲歟、或通路をさいきるくき時節
召出、抹可被申付事

(後略)

以上

元徳三年
八月十日

保科筑前守殿

五 北条氏堯朱印状（折紙）
 ○多門坊文書
 ○富士市中里
 小麦石之小屋、可被相拘事簡要ニ候、依走廻ニ氏政・
 氏実（真）へ御取合可申上候、尚各々相談、彼小屋可被拘事
（今川）
 専一候、仍如件、
 巳（永禄十二年）
 七月四日（印文「福寿」）
 二宮織部之丞 奉之
 長谷川八郎左衛門尉
（駿河国富士郡） 多門坊
（富士郡） 実相坊
（富士郡） 大鏡坊
（富士郡） 須津小屋中

こういったことが静岡県にあるかということ、ありました。永禄12年（1569）、小田原北条氏が今川氏の援軍に来ますので、小田原北条方についた連中ですね。

「小麦石小屋」。小麦石小屋というところが、愛鷹山中あしたかにあったんです。ちょっと、紹介します。

「多門坊たもんぼう、実相坊じっそうぼう、大鏡坊だいきょうぼう、須津小屋すどごや」。ここに、「須津の小屋」というのも出てきます。ここにも小屋があって、修験者、修験僧も一緒に小屋に入ったようです。

一五〇六 北条家朱印状
渡井文書
○富士宮市精進川
(駿河国富士郡)
 布沢之郷小屋之者共、何も赦免候間、為先此印判可被
 申付候、軍勢甲乙人彼男女ニ手指候者、可処嚴科者
 也、仍如件、
(天正十年)
壬午
 三月六日
(印文「禄寿応穩」)
 源五郎殿
 拵和伯耆守
(康忠) 奉之

小田原北条氏も村人に対して、小屋を大事に管理しなさい、と言っているわけです。こちらの方に出てきます。

「ぬのざわ布沢の小屋」

布沢の小屋、場所は、にしまほんもんじ西山本門寺の近くです。

武田氏が滅亡する時、小田原北条氏が元気よく、ワーッと攻めてきます。小田原北条軍の軍勢は小屋の中に入ってはいけない。男女に手出ししてはいけない、小屋に入れば、厳罰に処する、首をはねるよと、言っています。

6-2 愛鷹山中の山小屋は村人たちの避難所か！



すどがわ おおたな
須津川のところにキャンプ場と大畑の滝がある地点、その背後に、この小麦石小屋
があったんです。場所はですね、実を言うと見えないところにあります。この稜線
が邪魔になって、隠れ蓑になって、その後ろ側です。

村単位、郷単位にこういった
小屋を村が管理して、そこに入
る山小屋が存在したと言うこと
を明確に伝えております。

現実に、われわれ静岡古城研
究会では、探しました。そうし
たら、「小麦石小屋」というの
が、ここにありました。

あしたかやま のこぎりだけ
これは愛鷹山の鋸岳ですね。
そこへずうーっつつめてゆくと、



私が20年以上前に現地を調査したときの写真です。

あざめい こむぎいし
字名が「小麦石」という所なんです。大きな岩に、石がぼてぼてとくっついた小
麦岩になったような、そういう状況なんですね。

3～4年ほど前に見つけた、愛鷹山中の砦です。ここが「霞」という地名なもん
ですから、勝手に霞の城山と呼んでいます。あしたか とりで かすみ
東海大学が山の中腹にあります。ここ
をずうーっつ行った、ここです。

こういった平坦部がありまして、まさしく、愛鷹山は信仰の山、修験の山ですから。どうも、前に述べた避難所になった可能性が高いので、色々調査しております。

きちんとした資料は残念ながら出てきません。



7 竜爪山は村人たちの避難所か！！

7-1 竜爪山について



1. 信仰の山
2. 雨乞いの山
3. 猟場の山
4. 金山の山
5. 牧の山
6. ……？

それでは、いよいよ最後の本題に入っていきたい
と思います。

^{りゅうそうさん}竜爪山というのはですね、山頂の高いところ、
^{やくし}薬師さん、^{もんじゆ}文珠さんという仏さんの名前が付けられ
ているので、信仰の山であることは広く知られてい
ますが、その他に竜爪山というのは、機能的にどう
いった装置があったのか？

というのは、こういう風に言われています。

1. 信仰の山
2. 雨乞いの山：農業信仰です。^{ひでり}旱に対する雨乞い

の山であった。

3. 猟場の山：竜爪山はとても良い猟場であった。
4. 金山の山：竜爪山北側に「^{ほうきんくぼ}峰金窪」という金山があったという。
5. 牧の山：自然にいた、野生馬がいたという。
6. はてな？

これは、あくまでも孫引きでありますので、私も確信はありませんが、これから
問題にして頂きたいのが、6番目の「はてな？」ということです。

7-2 信仰の山である竜爪山は、村人たちの避難所か！！



↑穂積神社

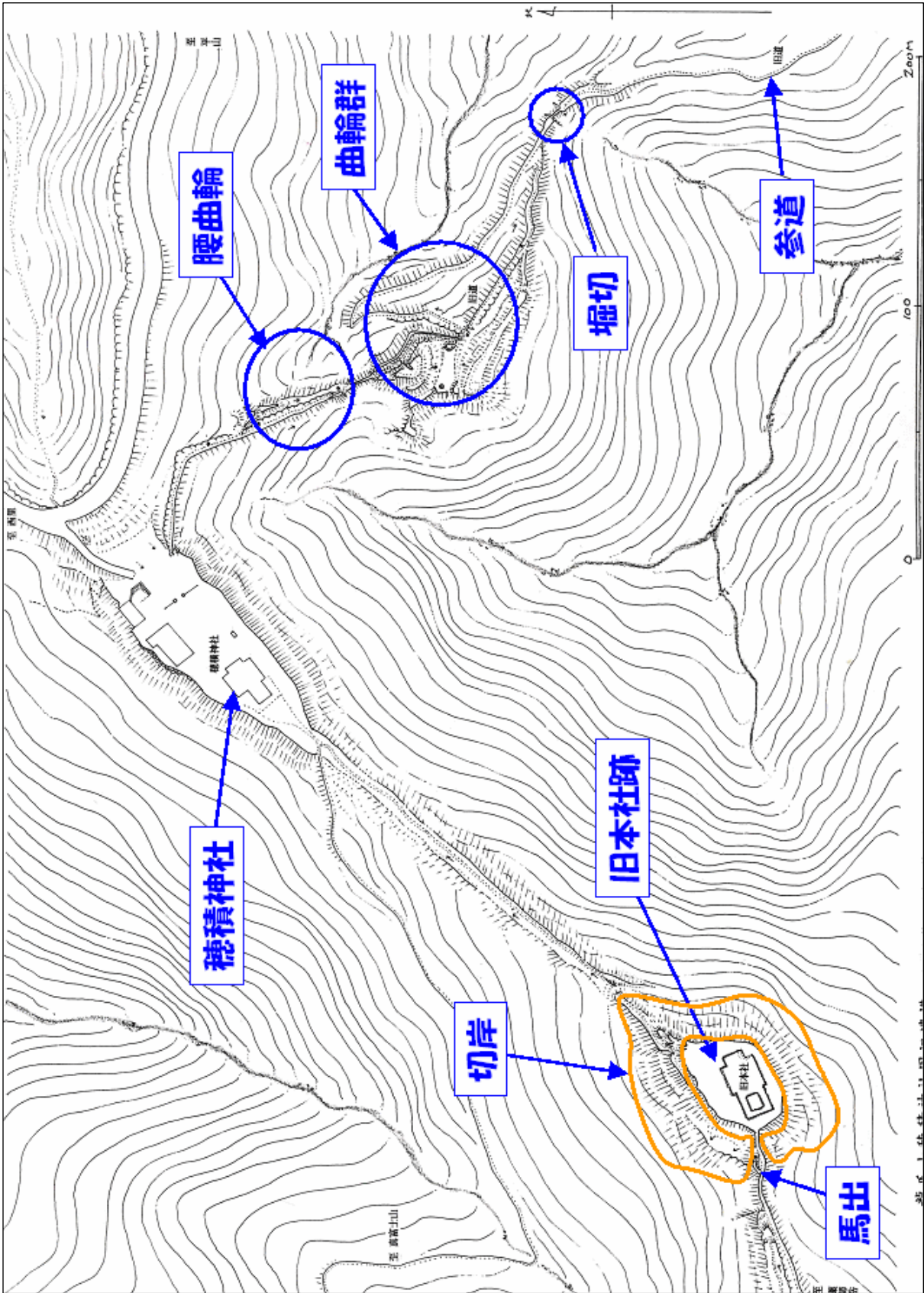


↑旧本社（昭和7年まで）

同じように、信仰の山を中心にして、どうも^{あしたかやま}愛鷹山と同じように、避難場所になっ
た可能性が高いということで、徹底的に今調査しております。かなり、調査しまし
た。これは、^{ほずみじんじゃ}穂積神社です。

穂積神社の背後の所に、旧本社があった。この一帯を調査したら、まさしく形態
が、山城形態です。

7-3 穂積神社は城郭構造か！



われわれ静岡古城研究会の基礎的な資料、「縄張図」といわれる測量図です。これが、穂積神社。これからずうーっと、穂積神社の背後の所に、旧本社があった。この一帯を調査したら、まさしく形態が、山城形態です。細尾根を上がって行くと、旧本社があって、これは完璧に山城の形です。

横は切岸きりぎしといって、自然の山腹を角度を付けて、きつくしているんです。自然の地形を利用して三方をきつくして、前に馬出うまだし、出入り口を守る空間のような所。

これは、参道です。下から上がってくる山道です。この中腹の所に、腰曲輪こしぐるわとか、堀っぽいものがあります。これは、堀切ほりきりです。

これは腰曲輪です。山城なんかに普遍的にあるものです。

どうもこの一帯は、この穂積神社を中心にして、回りには敵からの攻撃を防ごうとする装置があるんだろうと思います。

用語説明

- ◇縄張図（なわばりず）とは、城郭の跡を確認し、経験と勘をはたらかせて作成された平面図で、壁の高さをケバの長さで表現し、傾斜をケバの量で表現します。（ケバ：等高線上に描かれた縦の線）
- ◇馬出（うまだし） 曲輪の出入り口。
- ◇切岸（きりぎし） 斜面を削って人工的に断崖とした所。
- ◇曲輪（くるわ） 兵が駐屯する平坦部。
- ◇腰曲輪（こしぐるわ） 階段状になった曲輪。
- ◇堀切（ほりきり） 敵の侵入を遮断するための堀。

7-4 竜爪山は広大な山小屋＝城郭



現地調査したときの模様です。文珠さんの一番高い所です。



多く存在する護摩壇か

文珠さんは自然の山でわかりませんでした。いたるところに、尾根が出ていて、こういった平坦部があるんですね。これはもしかしたら、信仰の山だから、修験者がごまだん護摩壇で火を焚いたところかなと思ったりして、よくわかりませんが、こういった尾根がいたるところにあります。



文珠岳東南の尾根上に平坦地

実はここ、少し見えませんが、4mほど下がった所に、ぐるっと平坦場が回っています。人工的に作った場所ですね。

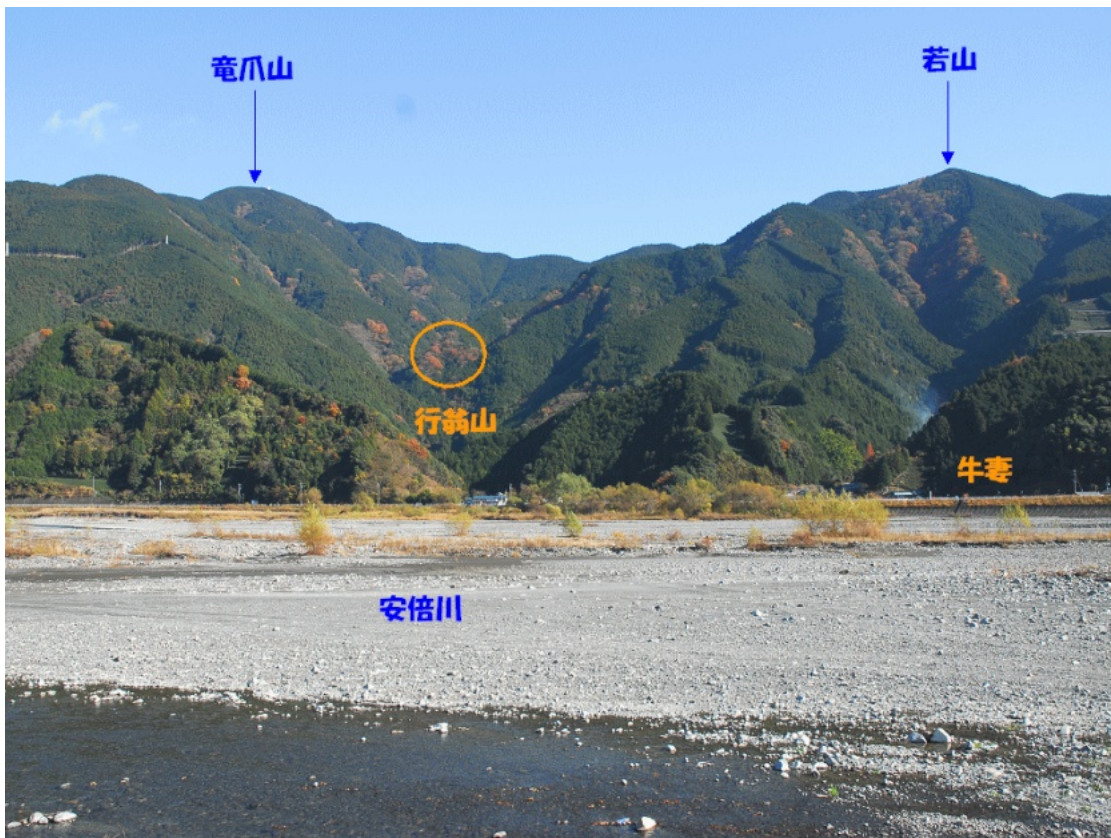


平山からの参道に堀切

これがほりきり堀切ですね。旧参道で、今は山道になっております。土橋状になっていますが、向こうに行けないように遮断しています。

こういった構造を見ると、竜爪山山中というのは、こんな風に思っています。「山小屋」、言い換えれば「城郭」である「山城」の一つである、と思っています。

7-5 竜爪山周辺で確認された城郭遺構「行翁山」



↑ 竜爪山西方の松野より望む

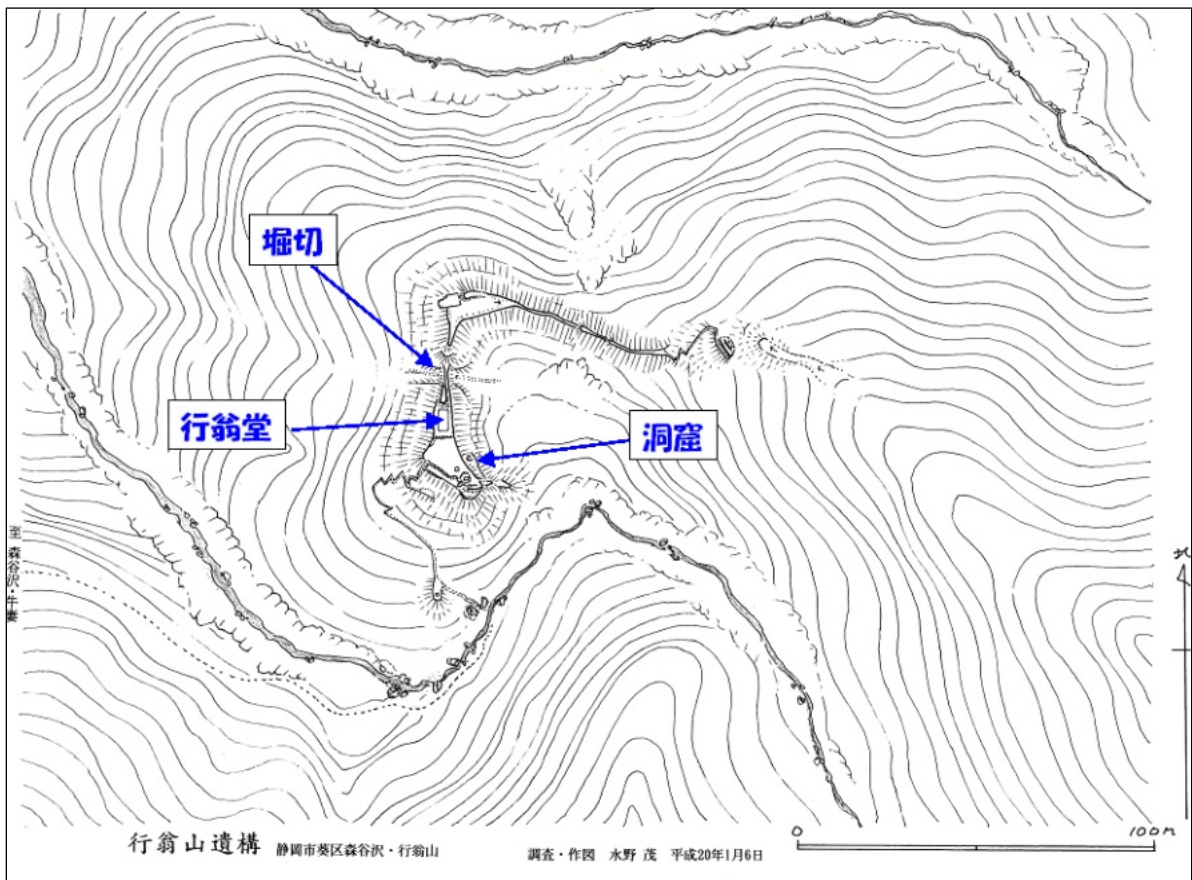
それではこの周辺に、他に遺構はないだろうかということで、^{うしづま あべかわ}牛妻、安倍川の方へ行って、探しました。そうしたら、^{ぎょうおうさん}行翁山という有名な所がありますね。竜爪山の信仰を広めた、行翁和尚が修行した場所です。

ここが牛妻の集落、ここが^{わかやま}若山、これが竜爪山の山頂ですね。ここへ行くには、ここから車をおいて、ずうっと山腹中に道がついております。

これを拡大写しにしますと、このひどい所ですね。ここに籠って、こういった所で修行したということがわかります。



7-5-1 「行翁山」遺構図



ここへ行ってきました。現地、遺構図です。
小さいですよ。回りは谷、ものすごい急峻です。

そのときの模様、ちょっと写真でご説明しますと、背後が崖ですね。70~80mほどあります。谷へいったん降りて、ここからまたずうーっと上がるんですね。





山頂にあがると、そんなに
広くないです。行翁堂があっ
て、行翁さんの木像がここに
安置されています。

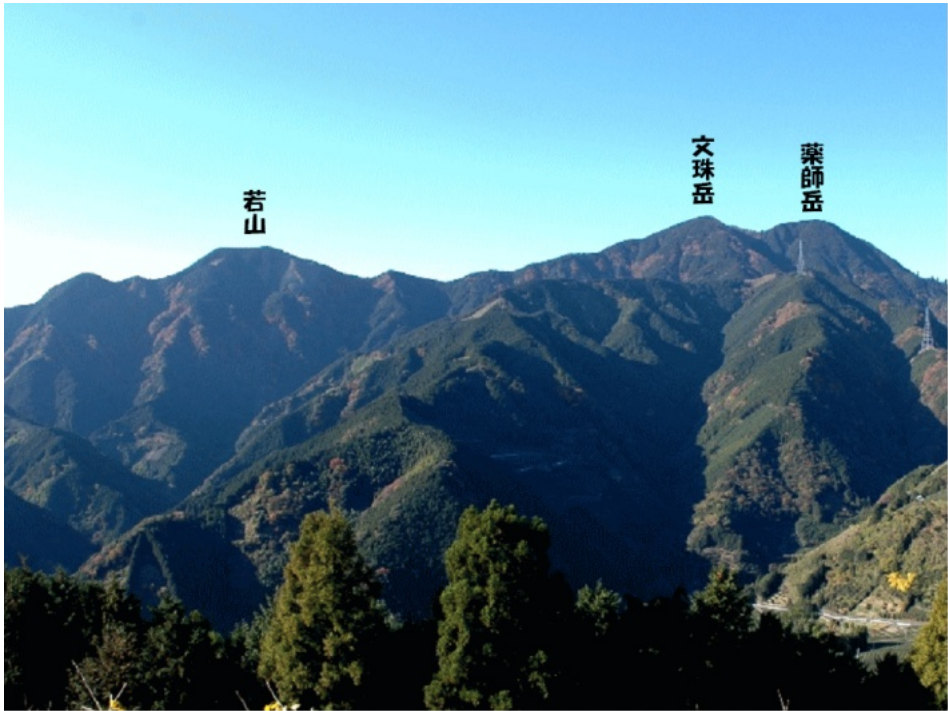


そしてなおかつ、東側の山
腹には、行翁さんが修行した
洞窟は、この山腹ですね。



行翁堂の背後に、完璧に、
ほりきり
堀切がこういう風にあります。
山城に間違いないというこ
とで確認できました。

7-6 若山にも城郭遺構



わかやま
竜爪山南側の若山、ここにも山城の遺構が遺っておりました。

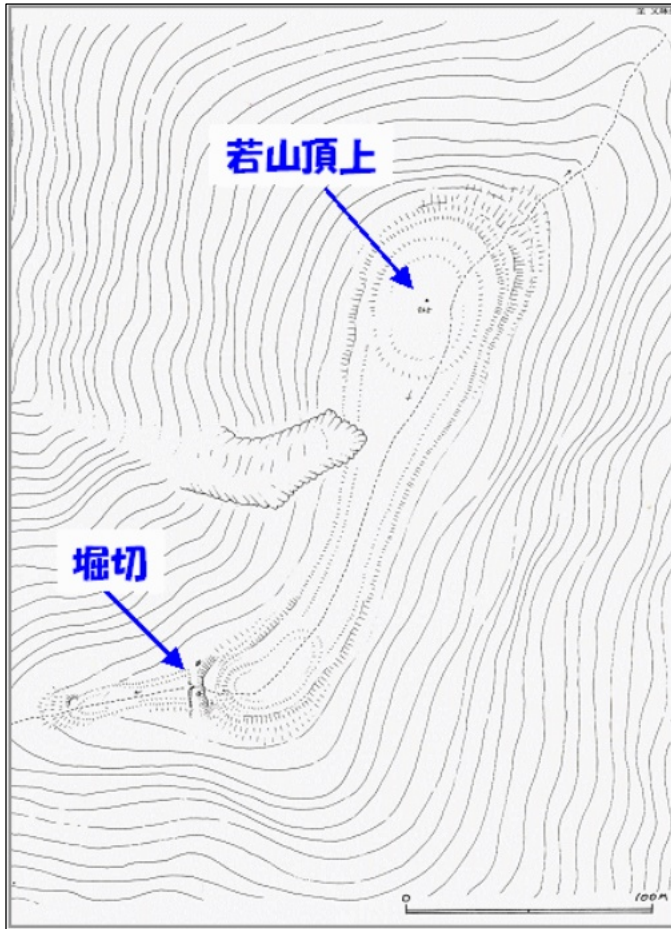
若山の上は、だだっぴろい自然地形なんです。

←若山山頂

ちょっと皆さん、わかりにくいと思いますが、これが堀切、もうかなり埋まっています。

堀切→





若山を遺構図から見ますと、上は広いんですが、一番南側の狭くなったところに、堀切を築いています。

こういうのは、簡単な陣城じんじろで、最近たくさん見つかっています。静岡古城研究会では、堀切ひとつでも、完成した簡単な山城であったことが確認できています。

← 若山 遺構図

7-7 13年前に発見した「長尾砦」



これは、私が13年前に発見した「ながおとりで長尾砦」です。長尾集落の背後の所、ここにあります。



←柏尾峠 静岡市清水区

これを西側から見ると、旧・清水市の柏尾集落に抜ける柏尾峠。

この柏尾峠越えの北側の高い所。長尾砦が見つかりました。結構この周辺にはいろんなものが見つっています。

これは当時、記録とか、地元の伝承、城郭の地名とか、何にも残っておりません。ですから、地元の方々などから情報をいただいて、もっと正確に位置付けたいと思います。



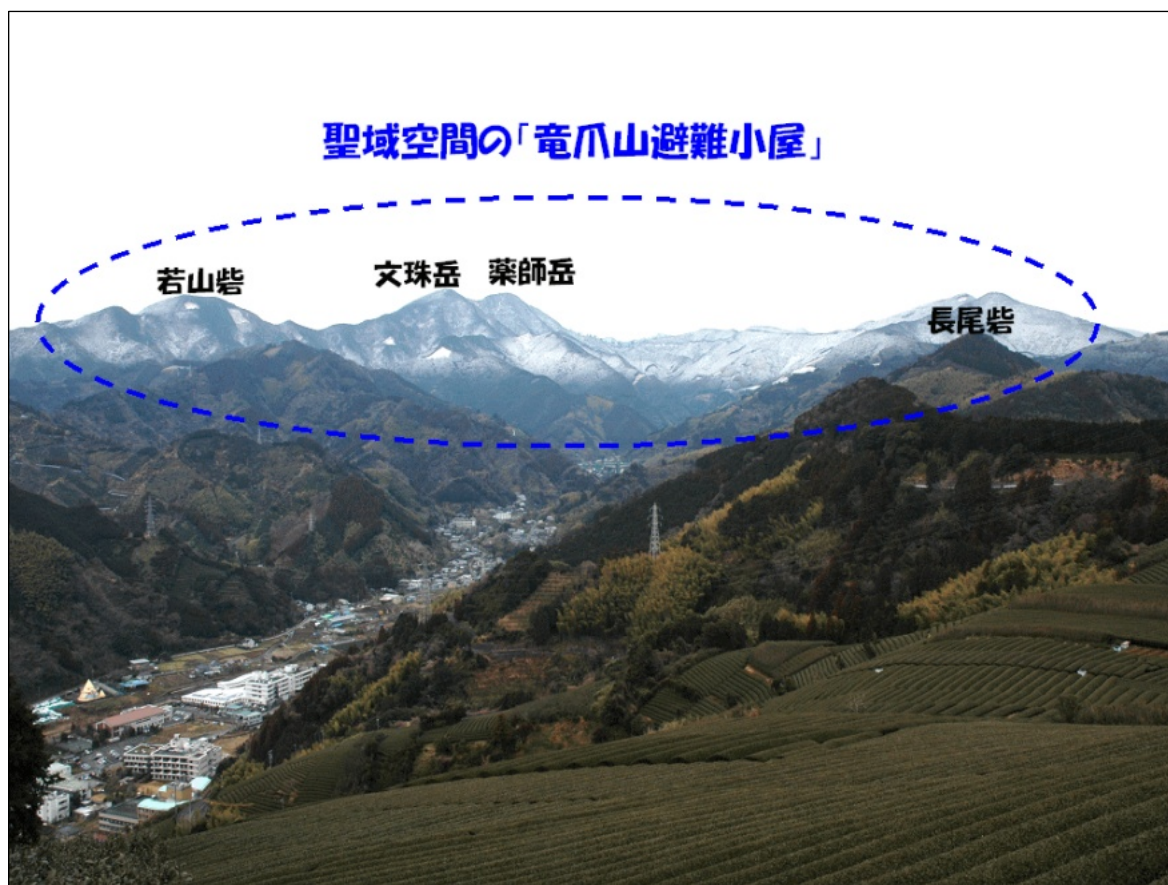
7-8 ジョアン・ロドリゲス 『大航海時代叢書』

ジョアン・ロドリゲスという人物。ポルトガル人でイエズス会に帰依していて、貿易商人なんです。ものすごく日本語が堪能で、日本の記録を『大航海時代叢書』に残しております。その記録の中で、ロドリゲスがどう言っているかということ、面白いですよ。

「戦乱による火災のために全てが破壊された。一般に領主と身分の高い貴族は、高い山にある城郭に住み、その他の村人たちは山中の森林や山頂、または叢林（草深い所）に住み、それらの屋敷はいずれも、通常、茅や乾草で囲ってできていた。」

というようなことが、書かれています。村人たちの避難する場所が、こういった状況ではっきりロドリゲスが記しているところです。

7-9 聖域空間の「竜爪山避難小屋」



りゅうそうさん
竜爪山山系は、あくまでも信仰の山であることが中心です。この聖域空間は避難場所として、「竜爪山避難小屋」としてうたっていいだろうと思います。駿府周辺の多くの村人たちが独自の避難所を確保し、逃げ込んでいた、という位置付けができると思います。

竜爪山城は広いので、まだ四分の一程度、現地を調査しただけです。まだこれから、面白い発見がたくさんあると思うんですね。

ところで、竜爪山中で堀跡、平らで人工的なところがあったらお教え願いたいと思っております。

ご清聴ありがとうございました。